第１３０回役員会・第５７回経営審議会　議事要録

日　時：２０２１年１１月２９日(月)１０：００～１１：３０
会　場：Microsoft Teams によるオンライン会議
出席者：津田理事長、松尾副理事長、白川理事、古川理事、柳井理事、龍理事、中本理事、
井上委員、今川委員、若菜委員、久保委員、柏原委員、小林委員、瓜生委員、
松永委員
（オブザーバー）中野監事、福田監事、二宮副学長、中尾副学長

報　告
１　教職員の功績表彰について
２　公益財団法人日産財団・第４回リカジョ育成賞のグランプリ受賞について
３　法人評価委員会の評価結果について
４　２０２１年度計画進捗状況について
５　北九州市立大学教職員の期末・勤勉手当等について
６　北九州市立大学 i-Design コミュニティカレッジの領域の追加について
７　２０２１年度大学の地域貢献度調査結果について
８　新型コロナウイルスワクチンの大学拠点接種について

報告１　教職員の功績表彰について

＜質疑応答＞
［議長］
○　王教授が育てたマネジメント研究科の修了生の絆は強く、非常に地域の発展に貢献している。また、海外から１億円という多額の寄附を獲得し、キャンパス内に新たな施設が整備されることとなるなど、王教授には多大なる貢献をいただいた。

報告２　公益財団法人日産財団・第４回リカジョ育成賞のグランプリ受賞について

＜質疑応答＞
［委員］
○　国際環境工学部のこの活動は大変素晴らしいものであると思う。大学の出張講義は、中高生にとっては研究者を目指すきっかけになるなど非常にインパクトのあるものであると思う。現在、他の学部では出張講義の実績又は計画があるか。また、このような活動をもっと広げていくように考えているか。
［副理事長］
○　この国際環境工学部の取組は非常に素晴らしく、若手の教員と職員が一緒になり積極的に取り組んでいただいた。この国際環境工学部の取組以外についても、北方キャンパスでも高校等からオファーがあるものは取り組んでいる。例えば、文学部人間関係学科では、学内での卒業論文の中間発表会に高校生を招き、高校生向けにプレゼンをするといった取組を行ったりしている。それぞれの学部の特色に応じて若い教員がアイデアを出し、広い枠組みでの高大連携として積極的に取り組んでいるところである。
［委員］
○　非常に素晴らしい取組であると思う。日本では女子学生の理系への進学率が１５％程度と非常に低く、海外では女子の理系進学が多く、女子が理系に行くのは当たり前だが、日本だけ当たり前ではないという環境を変えていくという日本の社会課題の解決の一助を担っている。また、このマーケットはこれから非常に伸びしろがあり、お茶の水女子大学や奈良女子大学がこれから工学部を作る予定であり、北九州市立大学の女子を応援するといったメッセージも非常

に重要であると思う。この活動を継続的に続けていくことで女子学生へのメッセージや北九州市立大学のブランドにつながっていくと思うので、諦めずに力強く進めていってほしい。

［委員］

○　この取組はとても意義あるものにつながると感じた。現在、出張講義に行っている対象の学校はどのようにして選んでいるのか、中学校や高校からオファーがあったものに対応しているのか教えてほしい。また、今後、出張講義を拡大していくときの方向性として検討しているものがあれば教えてほしい。

［教員］

○　具体的には、北九州市内の全中学校に対して出張講義の申し込みを行ってもらうように依頼し、申し込みのあった全中学校に教員と学生を派遣し、出張講義と座談会を実施している。１年目は新型コロナウイルスの影響がなく１０校程度の多くの申し込みがあったが、２年目以降は新型コロナウイルスの影響により申し込みが少なくなった。現在の所は申し込みのあった全ての学校に対応するようにしている。また、教員と学生を派遣する範囲は現在のところは北九州市内としているが、もう少し広げられるところまで広げていきたいと考えている。遠方など教員と学生を派遣するのが難しい地域は要相談となるが、派遣できる範囲内であればできるだけ広げて対応していきたいと思う。

［委員］

○　プロジェクトの目的としている入口から出口までが一体化した理系女性のキャリアパスの場について、理系も分野によって女性比率にばらつきがあるため、専門によって随分違ってくると思うがどのように考えているか。

［教員］

○　確かに国際環境工学部でも機械系の機械システム工学科は女性比率が最も低く、生物系の環境生命工学科は女性比率が約半数と最も高くなっている。ただ、出張講義は生物系だけでなく機械系・情報系の教員と女子学生も派遣しており、女性比率が少ない分野についても、実際に大学で学んでいる女子学生の話を中学生・高校生が聞くことができるというのは、大きな体験になっていると思う。このような体験をきっかけに、女子生徒に馴染みが少ない機械系の分野にも女子生徒に入学してもらい、そして、関連分野に就職してもらうことで、このような所に就職しているということを学生の口からダイレクトに中学生・高校生に説明してもらえれば、入口から出口までの流れができるのではないかと考えている。

［委員］

○　今の世の中はデータや技術に基づくものの見方は減ってきていて、どちらかというと単なる風潮やうわさなどで動く世の中になってきていると思う。そうではなく、データも含めたものの事実を見ながら世の中を見るといった感性を持った生徒が増えていくことが大事であると思うので、ぜひ今後もこの活動を続けていただきたい。

［委員］

○　この国際環境工学部の取組とは直接は関係ないが、参考までに事例を紹介する。子どもたちの未来に何か貢献できることをということで、北九州市の東京事務所を中心に、東京に在住する北九州市出身の経営者の会が活動しており、経営者の経験や経験に基づく考え方を伝えていく出張講義を高校を中心に始めたところであり、今後このような活動を増やしていくことを計画している。

［議長］

○　福岡県でも福岡経済同友会が学校への出張講義をかなりの回数行っており、北九州市も１０校程度回っている。このような経験者から子どもたちに物事や可能性の広さを伝えていくということは非常に大事なことであり、そこで大学が中心となって果せる役割があると思うので、これからも頑張っていただきたい。

報告３　法人評価委員会の評価結果について

＜質疑応答＞

［委員］

○　オンライン授業について、教員によってスキルの差がかなりあるといったこと、学修意欲の少ない学生が怠けてしまうということ、オンデマンド方式であると学生が深夜に視聴するようになって生活の乱れが出てきてしまうこと、学生同士の人間関係が作れないことなどの問題が出てきた。このようなオンラインのデメリットを今後どのように解消していくのか、方針を伺いたい。

［副理事長］

○　やはりオンライン授業については、うまくやれない教員もいるため、ＦＤ研修という形でうまい取組を行っている教員に取組を発表をしてもらった。また、特に若い教員がうまくやっているので、同じ学部学科内で協力し合う体制を作ってもらった。今はほとんどの授業で対面授業に移行したが、オンラインのメリットを活かすということを考えて、非常に先進的なオンラインでの取組を行っている教員については、ＦＤ研修などで他の教員に取組を発表してもらうことを前提として、オンライン授業を認めることとした。来年度からその先進的な教員のオンラインでの取組が始まるので、今後もオンラインのメリットを活かしていきたいと思っている。

［理事］

○　オンラインの授業の元でも教育の質保証は重要であると考えており、授業実施報告書や授業アンケートから学生の声を拾い、それに対応するような内容でＦＤ研修を数回実施した。その中で、引きこもってしまった学生や色々な問題を抱えた学生がそのまま放置されてしまうということがないように、教員等へ啓発を行った。

報告４　２０２１年度計画進捗状況について

＜質疑応答＞

［委員］

○　教育分野の優秀な学生の確保について、今年度かなり志願者数が減っているが、志願者が年内入試にかなりシフトしていて、一般入試より前の、総合型選抜や学校推薦型選抜にシフトしつつある。これは新型コロナウイルスの影響により急速に進んだのだが、これからそれほど戻らなのではないかという予測もなされている。一方で、今年度から高校の学習指導要領が変わり、探求型学習を中心に行っていくこととなり、この生徒たちが２０２５年度に本学に入学してくることになる。そうすると２０２４年度に新たな入試を行うことが必要になるが、その広報というのは２年前ルールにより、入試実施の２年前までに広報しなければならないため、２０２２年度には高校生に向けて新たな入試の広報を行うことが求められてくる。２０２３年度からの中期計画で、２０２５年度からの入学生への入試のことが入ってくることと見受けられるが、２０２２年度の取組の中でもう少し新たな優秀な学生の確保に向けた入学者選抜の在り方を検討していく必要があるのではないか。

［副理事長］

○　もちろん入試についてはＡＰも含めて見直していかなければならないと思っている。ここに記載しているものは現中期計画の枠組みの中でそれに対応したものだけ取り上げているので、これ以外にもプラスアルファのものがかなりある。当然入試についても変革が迫られるので、これは今も見直しをしながら進めているところである。

［理事］

○　学習指導要領の変更で最も大きな点が情報系の科目の導入であると思う。本学もこれに対応する形で次年度からデータサイエンスの科目を設置し、副専攻と言う形で何とか体系化できないかと考えている。本学としてはそのあたりを出張講義や高校訪問を活用して高校側にアピールし、受験生を獲得していきたいと思う。

［委員］

○　教育分野について、事前事後学修時間の把握というのは、学生にどれだけ事前事後学修をしたかを記載させるということか。また、対面授業とオンライン授業を行った結果、学生の学修成果の違いについて教えてほしい。

［理事］
○　まず、事前事後学修の把握については、４月のオンラインでの履修登録の際に学生にアンケートをとっており、履修する科目の単位数の範囲でどれだけ予習・復習が行っているか、また、履修する科目に関連するＴＯＥＩＣや簿記などの自主学修がどれくらいあるか、このような授業外の学修時間をトータルして事前事後学修時間として把握している。アンケートに答えないと履修登録できない仕組みとなっているため、ほぼ１００％把握しているということになる。学生の学修成果の把握については、成績のＳＡＢＣＤ－を点数化して積み上げて算出したＧＰＡを活用している。
［委員］
○　社会貢献分野の地域共生教育センターのプロジェクトについて、プロジェクト数はどれくらいのあるのか。また、今後の活動としてＳＤＧｓの視点を取り入れることが記載されているが、プロジェクトが発足される仕組みがどのようになっているのか教えてほしい。
［事務局］
○　２０２２年度のプロジェクト数は１８である。
［副理事長］
○　プロジェクトは、学生の興味関心、担当する教職員からの提案、地域からのオファーなどにより組まれているが、地域共生教育センターが設置されてかなりの年数がたつため、だいたいこれまで継続して実施しているプロジェクトがあるので、それを引き続きやっていくというのがある程度の割合を占めている。ただ、その時期の社会の要請に応じて作られていくという形もあるので、一概にプロジェクトの発足の仕方が決まっているというわけではない。
［委員］
○　コロナ世代で育った学生が自分たちの会社に入社してきた際に、どの程度のレベルで入社してくるのか非常に不安感がある。学問や専門性も大事だが、人とのつながりや社会性といったものを素養として学生時代に身に付けておいていただかないと会社で大変なことになるので、オンラインだけでなくリアルでの集団の中での人材育成というのを、残りの卒業するまでの間にしっかりとやっていただきたい。
［副理事長］
○　今回のこの報告は２０２２年度の取組の頭出しになっているが、この枠に入らないものもいくつかある。一つは学生向けのデータサイエンス教育を来年度から始める。もう一つはダイバーシティの推進を始める。すでに今年度ダイバーシティ推進担当の学長補佐を配置しており、ワーキンググループで色々な検討をしており、検討した内容について来年度以降に色々な形で実現できると考えている。

報告５　北九州市立大学教職員の期末・勤勉手当等について

＜質疑応答＞
なし

報告６　北九州市立大学 i-Design コミュニティカレッジの領域の追加について

＜質疑応答＞
なし

報告７　２０２１年度大学の地域貢献度調査結果について

＜質疑応答＞
［委員］
○　この手のランキングは指標が頻繁に変わるし、評判の一つの指標として見ていき、どこが本学の強みなのかということを認識して、うまく広報に使っていければよいと考える。

［議長］
○　本学は学生一人当たりの教員数が非常に少なくなっている状況があり、教員に負担をかけながら大学を運営している。これを改善できるように理事長として頑張っていきたいと思う。

報告８　新型コロナウイルスワクチンの大学拠点接種について

＜質疑応答＞
なし